

出張報告

報告日 令和4（2022）年10月5日

会 派 名	社会クラブ・柏崎のみらい連合
報告者氏名	笠原 晴彦、飯塚 寿之、秋間 一英、星野 幸彦、佐藤 正典
種 別	<input checked="" type="checkbox"/> 調査研究（ <input checked="" type="checkbox"/> 行政視察） <input type="checkbox"/> 研修会 <input type="checkbox"/> 要請・陳情 <input type="checkbox"/> 各種会議
用 務	会派行政視察
日 時	令和4年7月29日（金） 10:00～16:30
場 所 （会場）	新潟県三条市 1. 一ノ木戸ポプラ学園（三条市立一ノ木戸小学校/三条市立第二中学校） 2. マルナオ 株式会社 3. 株式会社 諏訪田製作所 4. 株式会社 タダフサ
調査項目等	1. 三条市が小中一貫校を開設するに至った経緯、学校運営における現状とメリット、デメリットについて 2. 三条市地場産業における現場の状況と後継者の育成等について
概 要	1. 三条市小中一貫校に関する意見交換及び現場視察 ①三条市が小中一貫校を開設するに至った経緯、学校運営における現状とメリット、デメリット等について、三条市立一ノ木戸小学校、第二中学校のそれぞれの校長先生及び教育委員会の担当職員より説明を受け、その後、質疑、意見交換を行った。 ②小中一貫校の学校施設全体を見学させていただき、学校施設の有効活用についての事例を学んだ。 2. 三条市地場産業における3つの事業所（工場の生産現場）を見学させていただき、魅力ある製品づくり、技術の継承、若者が魅力とやりがいを感じる生産現場の現状、若者の就労・後継者の育成等についての成功事例を学んだ。
所 管 等	次のとおり

① 三条市における小中一貫校についての教育委員会と意見交換と現場視察

三条市としては、小中一貫教育を導入し児童生徒の発達段階（基礎充実期 小1・2・3・4 活用期 小5・6 中1 伸長期 中2・3）を考慮しながら、学校、家庭、地域が一体となった教育を展開。中1ギャップ問題を解決するために小中学校が連携、交流することにより、児童生徒の豊かな心、健やかな身体、学力の向上を図る目的として進められている。

保護者、地域、学校が一体とならなくてはできないことだと感じた。市全体で小中一貫校の推進に取り組むことで、学校の在り方を作っている。当時の市長の強い思いもあったが、それに対応した多くの人々の力により実現できたことと思う。通学時間や距離、小中一貫校を計画した時の地域の課題等について踏み込んだ回答が時間の関係でできなかったのが残念であった。

② 三条市の地場産業の状況

3社を訪問して感じたことは、伝統的な産業なのに、何か新しいものを感じさせているところが、集客につながっているところである。様々な年代の方に興味を持たせる発信力、安いものではないのに欲しくなる。うまく言葉で言い表せないが、なんかかっこいいのである。従業員も施設も地場産業を盛り上げ、自分のところだけでなく全体で盛り上げている姿に感銘を受けた。行政の支援も評価するところである。柏崎市の業者ともつながりがあるという話をお聞きし、連携しながらいいところはマネをし、お互いに利用し、柏崎でも取り組めるものを進めていただきたい。

会派行政視察 所感

会派名 社会クラブ柏崎のみらい

議員名 飯塚寿之

1. 三条市における小中一貫校についての教育委員会と意見交換と現場視察

(1) 小中一貫校の導入、実施のプロセスは以下のとおり

平成 19 年 1 月に教育制度等検討委員会設置して以降、

小中一貫校教育検討委員会設置～「三条市小中一貫教育基本方針」策定

三条市教育委員会内に一貫教育推進室設置、三条市小中一貫推進委員会設置～

「三条市小中一貫教育推進指針」策定

三条市教育委員会内に小中教育一貫教育推進・教育センター設置という議論の経過を経て平成 25 年 4 月～全市で小中一貫教育の全面実施となった（24 小学校、9 中学）

(2) 小中一貫校導入の背景

身に付けたことを活用して論理的思考力の育成を図ることを重視した小 5、小 6、中 1 を特に重要な期間と位置付けたこと、中 1 ギャップ解消などが政策的背景である

(3) 小中一貫校のメリット

①9 年間のカリキュラムをつなぐ、わかる授業の具現化

②乗り入れ授業により、小学生にとっては興味、関心の高まり、より深い学習内容の理解が進むこと。中学生にとっては学習意欲の高まりと安心感が得られること

③中学校への不安軽減、中学生の自己有用感の向上、学習意欲の向上

(4) 小中一貫教育を支える組織、仕組み

三条市教育委員会を軸に、小中一貫教育推進委員会（部会活動）、学園運営協議会、学園長会議、学校運営会議、コミュニティスクール導入による各学校における運営協議会、教職員の小中合同検討会、各種連絡会など各種、多様なたくさんの会議がある

(5) 所 感

小中一貫校の推進は、たくさんの人の力が必要である。関わる全ての人に「連携力」「観察力」が求められる。地域の力も必要である。教育予算を確実に確保しなければならない。少子化、統廃合問題をはるかに飛び越えた「独自の教育政策」である。時間があれば各学園エリアの通学時間の問題、地域がどう変わってきたか、など一貫校づくりをめぐる地域の様々な課題、議論について理解を深めたかった。

2. 三条市の地場産業の状況

訪問した 3 社に共通すること。伝統の技に誇りを持ち、技を継承しつつ、リブランディングの取り組みで企業理念、事業目的を明確にし、社外に発信したことである。結果として雇用増、売り上げ増。とりわけ若い職人、女性の職人が倍増している。また製品価格そのものは高いが、価値ある製品、価値ある技術として海外含め、市場に認められている。「職人の技を見せる」きれいなオープンファクトリーには見学客が多い。行政の前向きな制度支援も評価すべきである。今までと同じことを繰り返していても淘汰されるばかりである。「変化を恐れない勇氣」こそ、柏崎市の地場産業に必要なのではないか。

会派行政視察 所感

会派名 社会クラブ・柏崎のみらい連合

議員名 秋間一英

① 三条市における小中一貫校についての教育委員会と意見交換と現場視察

- 平成 19 年より「教育制度等検討委員会」を設置し平成 25 年度には全市において小中一貫校に踏み切ったことについては感心させられた。
- 柏崎と同じような面積で人口は多いが似ているような環境ではないかと推察されるなか、15 年前から小中一貫校に取り組む姿勢、危機感はある先を見据えたグランドがしっかりと考えていたのではないかと思う、柏崎は人口減少を心配するも学区統合という手段しか表明していないがこれしか方法がないのか、違った見方をすべきでなかったかと思う。
- 校舎見学をさせていただいたが、2F に体育館、屋上にプールと先進的なつくりの校舎に驚きかんしんした。生徒たちもみんな挨拶もしっかりとされ素晴らしいと感心した。
- 国や県からの指導もあると思うがもっと柏崎の環境に合った取り組みなどが必要ではないかと思う

参考

	三条市	柏崎市	差
人口	94,137人	79,668人	-14,469
面積	432km ²	442km ²	+10
小学校数	20校	20校	±0
児童人数	4,383人	3,489人	-894
クラス数	259	158	-101
中学校数	9校	11校	+2
生徒人数	2,251人	1,782人	-469
クラス数	97	67	-30

② 三条市の地場産業の状況

- 3 社見学したが、昔ながらの金物工業で社員の方たちが仕事に誇りをもって作業し妥協しないモノづくりに感心した。
- どの会社も女性社員が男性と同じ作業しているところもあり輸出や OEM など地場産業が根付いていると感じ良い製品に繋がっているのではないと思った、同じような会社が柏崎内にあるのか市内の状況も IT 産業を含め見る必要を感じた。

会派行政視察 所感

会派名 社会クラブ・柏崎のみらい連合

議員名 星野 幸彦

① 三条市における小中一貫校についての教育委員会と意見交換と現場視察

一ノ木戸ポプラ学園を視察し、小中一貫教育導入の背景と経緯、メリット、組織づくりや仕組みづくり等の説明をいただいた。

三条市は小中一貫校を含む学校教育について、早くも平成19年から『教育制度等検討委員会』を立ち上げ、平成25年度に全市での小中一貫校を実施したとの事である。少子高齢化・人口減少の中での教育環境について早い段階での着手、そして時間をかけた地域・現場・こども・親の理解と共働には深く関心させられた。

柏崎市においても人口減少による学区統合が問題となっているが、小中一貫校を進めると言う事ではなく、学区統合を進めるにしても『地域・現場・こども・親』の理解は必須ではないかを感じる。そして理解を求めるには時間をかけた丁寧な進め方が望ましいと思った。

② 三条市の地場産業の状況

三条市の地場産業、いわゆるものづくりの現場を視察した。

硬木を使った箸等を製造するマルナオ株式会社、爪切り（話題のよく切れる）等を製造する株式会社 諏訪田製作所、多種多様な包丁を製造する株式会社 タダフサの三社を回った。

いずれの工場（イメージ的には制作現場・工房）も昔の工場からイメージされる油まみれだったり切り屑が散乱というのとは無縁であり、見学者に進んでものづくりを見てもらうと言うスタンスで『オープンファクトリー』化されていたことには驚いた。

オープンファクトリーにする事によって生まれた効果には、見学に来た地元の若い人の就職に直結したなどもある。オープンファクトリーだけでなくどの会社もものづくり産業が低迷していた時から生き延びるため様々な工夫や改革を行ってきたと言う。

ものづくり産業の勢いを感じた。柏崎市も三条市と同様に工業も重要視されているが決定的に異なっているのは部品製造主体であり『売れる製品』を持たない事が課題である。ロケットまで作れとは言わないが、魅力ある製品の開発に期待する。

① 三条市における小中一貫校についての教育委員会と意見交換と現場視察

一ノ木戸ポプラ学園は、一ノ木戸小学校618人、第二中学校288人を併設している、全体としては大規模な小中一貫教育校である。学校教育目標に加えて、「まなび」「こころ」「からだ」「ちいき」といった各分野の取り組みでは、「一貫性」ということがキーワードとなっているが、こうした教育方針により、9年間の在校期間において、児童・生徒が慣れ親しんだ環境で安心して学び育つことができるのだろう。

一ノ木戸ポプラ学園は正式名称ではなく呼称とのことだが、小中のそれぞれの校長が学園長、副学園長となっており、学園運営協議会を年3回程開催して、学園全体の、つまりは、小中学校同士の連絡調整が図られている。こうした動きは、通常の学校では当然なことであり、一貫校としての特徴を活かすための重要な業務の一つなのだろう。教育委員会としては、その分の職員を配置して、教職員の過度な負担にならないように配慮しているとの説明があったが、特徴ある一貫教育を進めるうえにおいては、そのための人材も必要であることがわかった。

小中一貫教育のグランドデザインにおける、「リトルティーチャー活動」＝すなわち、小学校の児童と中学校の生徒との交流活動が、一貫校としての最も大きな特徴でありメリットだと感じた。

今後、多くの地域において、人口減少による児童生徒の減少は避けられず、柏崎市においては学校の統廃合が喫緊の課題となっている。そうした中で、三条市における小中一貫校の取り組みは、既存の校舎の効率的な活用を含め、学校運営の一つの形として、大いに参考になった。

② 三条市の地場産業の状況

マルナオ株式会社（硬木による箸等の製造）、株式会社諏訪田製作所（Gデザイン賞のつめ切り等）、株式会社タダフサ（多種多様な包丁製品）の3事業所を見学して感じたことは、オープンファクトリーの効果は絶大であるということだ。まさに、ものづくりの生産者が生産現場を外部からのお客や見学者に公開し、場合によっては体験をしてもらうことで、そこで作り出される製品の価値や魅力は何倍にも高まり、結果として販売増加に間違いなく結びついている。

そしてもう一つのメリットとして、人材の確保である。3事業所でそれぞれ説明いただいた広報（営業）担当者は、いずれも若いお三方であったし、工場で製造にあたっている職人さんも若い方々が相当数おられた。社屋、工場が比較的新しいことはもちろんあるが、もはや、かつての3Kのイメージの町工場ではなく、きちんとした労働環境下の中で職人さんが生き活きと仕事を行い、会社もそうしたことを大切にしているのだと感じられた。だからこそ、多くの若者が三条の町工場に入り、技術を磨き、優れた製品を作り出していくのだと。このことの一部を本視察で見ることができた。

